MEDICAL PARTNERING vol.81

新時代の地域医療を考える情報誌 | メディカル・パートナリング | 2016.12

CLOSE UP HOSPITAL

地域包括ケアに向けた連携強化の取り組み

杏林大学医学部付属病院（東京都三鷹市）

CASE STUDY

若年者のメンタルヘルスに注力する精神科病院

医療法人社団 五稜会病院（札幌市北区）

Point of view 時流考察

介護療養病床の廃止と再編

大日本住友製薬

CASE STUDY

若年者のメンタルヘルスに注力する精神科病院

治療から職場復帰までサポート 思春期・若年者のメンタルヘルスに多職種協働でアプローチ

医療法人社団 五稜会病院
（札幌市北区）

理事長　中島 公博 先生

精神疾患により医療機関を受診する患者数は、年々増加傾向にあります。特にうつ病などの気分障害の患者数は増加が顕著で、2014年には15年前の約2.5倍にあたる111万6千人（厚生労働省「患者調査」より）にまで達しています。こうした背景もあり、2015年12月からは改正労働安全衛生法に基づく「ストレスチェック制度」が導入され、事業者には定期的に労働者のストレスに関わる検査を行うことが義務付けられました。

このように精神科医療へのニーズが高まるなか、思春期や若年層の患者さんを中心に、治療から社会復帰、さらに社会復帰後のフォローまで幅広くサポートしているのが札幌市の五稜会病院です。理事長の中島公博先生と各専門職の方々から、同院の取り組みについてお話を伺いました。

病院のイメージを払拭した新病棟と再発防止を目指した手厚い支援

五稜会病院は「情熱と個々への配慮」を理念とし、1972年に札幌市北区で開院しました。2014年には病院のイメージを払拭した空間デザインで、患者さんが安心・快適に過ごせる環境づくりを目指した新病棟が完成し、計193床（急性期治療病棟48床、ストレスケア・思春期病棟48床、療養病棟／閉鎖・開放97床）を有する精神科病院として、札幌市北区地域を中心とした精神保健福祉医療を担っています。

同院の大きな特徴は、今後、医療需要の拡大が見込まれる認知症高齢者などへの対応は地域の他医療機関に任せて、若年者のメンタルヘルスに注力している点です。「精神科領域においても機能分化が求められていることもありますが、もともと10代の患者さんが多かったこともあり、これから社会で活躍する青少年の精神疾患としっかり向き合い、手厚く支援することで地域に貢献したいとの思いがありました」と中島先生は語ります。以前から地域連携に力を入れていた同院では、高齢の患者さんを他の精神科病院やクリニックへ紹介できる体制も整っており、地域の中でもごく自然に「若年の患者さんは五稜会病院へ」という機能分化の流れが確立されていきました。

そして、もう一つの特徴が、治療だけではなく、患者さんの社会復帰やその後までを見据えた息の長い支援を実践していることです。「ご存知のとおり、精神疾患は処置や投薬などだけでは治療が難しい病気です。学校や職場、家庭での人間関係やプレッシャーがつまずきの原因になっているケースが多く、うつ状態が改善したと思っても、学校や職場に戻ることで再発し、入退院を繰り返してしまう人が多い。日常生活や社会生活にまでアプローチしないと治療が難しいというのが、長年にわたって患者さんを診てきた私の実感です」（中島先生）。このような考えに基づいて、患者さん一人ひとりへの細かな配慮や今後の生活基盤づくりに対する支援、さらに再発防止などを考えたときにアイデアとして出てきたのが、若年の気分障害などの患者さんの専用病棟である「ストレスケア・思春期病棟」、職場復帰を支援する「リワークヴィレッジ」、企業のメンタルヘルス対策を支援する「札幌CBT&EAPセンター」などでした。

患者さんから話を聞くことを重視「ストレスケア・思春期病棟」

「ストレスケア・思春期病棟」は、ストレスによって心と体のバランスが崩れ、一時的に治療や休養を必要とする若年層の患者さんを対象とした開放病棟です。気分障害・適応障害・不安障害・摂食障害・パニック障害・強迫神経症などの患者さんに対し、精神療法・薬物療法・作業療法・認知行動療法などの集中的な治療を行っていますが、最も多いのは約7割を占める気分障害（うつ、そううつ含む）の患者さんです。平均在院日数は47日で、入院治療を受けながら通勤や通学も可能です。10代の患者さんをはじめ、家族と離れて過ごすことや他の入院患者との関わりに不安を持つ人も多いため、病室はプライバシーを重視した個室が中心となっています。

同病棟の看護師長を務める浮田志保氏は、「患者さんは学校や会社に適応できずに悩んでいる人たちです。対面で自分の気持ちを伝えるのが苦手であること、そして、対人ストレスに弱く過重なストレスがかかると不調となり、どう生きて良いかわからず途方にくれてうつ病に迷い込んでいる方が多くみられます。私たち看護師に求められているのは、病気としてというより、本人の生きづらさに寄り添うことであり、患者さんとの会話に時間をかけているのがこの病棟の特徴かもしれません」と話します。

看護師長
浮田 志保 氏

機能不全家族が増えている現在、患者さんは、遠慮なく自分を出してぶつかり合い自分自身について学ぶという体験をしていなかったり、自分と向き合う強さがないために現実を避けて他者を責めるなどといった傾向にあることから、健康的な人間関係や人生観、考え方を看護師との会話の中で学んでもらうといった「個と丁寧に向き合う療育的ケア」や「自分の内面や人間関係と向き合い生活をただす」といった関わりをしています。

個々に見合ったプログラムで復職を支援「リワーク ヴィレッジ®」

入院治療を終えた患者さんや外来通院の患者さんで症状が一定以上回復した患者さんに対して、復職に向けたリハビリテーションを行っているのが「復職支援デイケア」です。活動の中心となっているのは病院に併設されている「リワークヴィレッジ」で、復職までの不安を同じ境遇の仲間と共有し、自分を見つめ直したり、仕事を振り返ったりすることで、再発の防止につなげるための活動が行われています。具体的には、認知行動療法をベースとした心理教育的なプログラムをはじめ、グループワーク、ディベート、スポーツなどのプログラムが多彩に用意されており、病気の回復程度や個々のペースに応じてプログラムが選択されます。

リワークヴィレッジでは、臨床心理士や作業療法士を中心に、必要に応じて看護師や精神保健福祉士などの多職種が関わり、お互いが情報を共有しながら患者さんが抱える問題の解決に力を尽くしています。定期的な活動によって再発防止、集中力の改善、体力の回復を図るだけではなく、朝から活動に参加することで、1日の生活リズムも取り戻せると言います。

リワークヴィレッジの主任である臨床心理士の清水陽平氏は、リワークの役割について「治療が終わっても、仕事に復帰するまでにはさまざまなハードルがあります。そのハードルを越えていくためには、心の傾向や働き方を自分で分析し、自分で結論を出さなければなりません。結果的に退職や転職を選択される人もいますが、その人にとってはそれが最良の道。自発的に結論が出るまで支援するのが私たちの役目です」と語ります。

臨床心理士
デイケア リワーク主任
清水 陽平 氏

支援に際してはそれぞれのキャリアや人格に敬意を払いつつ、同じ社会人としての視点を重視しているという清水氏。リワークを復職の条件としている産業医も増えており、ニーズは増加傾向にあるというのが実状です。

企業のメンタルヘルス対策に尽力「札幌CBT&EAPセンター®」

治療や復職支援とは異なり、企業を対象にしたメンタルヘルス支援事業部門として2013年に設立されたのが「札幌CBT&EAPセンター」です。CBTは認知行動療法、EAPは従業員援助プログラムを意味しており、臨床心理士や保健師が中心となってメンタルヘルス対策のためのカウンセリングやコンサルテーション、対策方法の立案、組織の改善サポートなどを実施しています。

「職場でのストレスが原因で発症する患者さんが増えている現状を見て、職場対策の一環として打ち出したのが本事業です。病院での治療だけではなく、職場での予防や復職後の再発防止までをシームレスに支援するというのが狙いですが、設立当初はまだストレスチェックが義務化されるとは思っていなかったので、タイミングのよさに驚いています」と中島先生が語るように、2015年に「ストレスチェック制度」が始まったことで企業契約数が大幅に増え、現在では道内に本社・支社のある約50社（従業員約1万人）と契約を交わすまでになりました。

札幌CBT＆EAPセンター
カウンセリングマネージャー
中村 亨 氏

同センターのカウンセリングマネージャー中村亨氏によると、ストレスチェックを依頼された場合は、導入支援や実施・実施事務のサポートなどを行い、さらに結果に応じた対策を提案するほか、必要であれば、企業研修や相談の窓口としても機能します。「我々は企業の側に立って行動することが多いので、病院内のスタッフとは立場は異なる点はありますが、企業の事情や要望に応じて適切なメンタルヘルス対策を提案できるのは、五稜会病院のバックアップがあればこそ。リワークヴィレッジのスタッフとともに企業を訪ねて主治医の意見を伝えたり、復職準備をしたりすることもあり、治療や復職支援の部門と連携することでより質の高い企業支援ができていることを実感しています」（中村氏）。

ストレス時代の現在では、企業側は病気の従業員にどう対応したらよいかわからない、産業医は復職のタイミングがわからないなど、企業内でさまざまな問題が顕在化してきています。それらの問題を解決する専門家集団として、「今後も我々のような活動に対するニーズも高まっていくのではないか」と中村氏は手応えを感じています。

多職種によるチーム医療が要 今後はさらなる早期支援を

このように治療から社会復帰、復帰後の再発防止まで切れ目なく患者さんを支援する同院ですが、活動の上で特に重視しているのがチーム医療です。同院では、医師を中心に多職種が集まる毎朝のミーティングをはじめ、勉強会、研修会など、スタッフ間の情報共有とスキルアップの場を多く設けてきました。「医師がすべてを担っていたのでは効率が悪い。患者さんの満足度向上のためにも、安定した経営のためにも、多職種が役割分担することが重要」と中島先生は強調します。スタッフからあがってきた提案を積極的に取り入れる風通しのよい環境も、患者さんへのきめ細かな対応を後押ししています。

最後に今後の展望をお聞きすると、「さらなる早期支援、早期退院を進めていく必要がある」と中島先生。同院の平均在院日数は、精神療養病棟を含めて96日と比較的短くなっていますが、「今後は退院支援に向け、ピアサポート（患者同士による支援）による意思決定支援、家族療法なども進んでいくでしょうし、スタッフにはどんどん新しい治療法や支援方法を提案してほしい。そのためには各スタッフが高い意識とスキルを身につけなければなりませんが、それが治療の質向上につながっていくはずです」（中島先生）。

五稜会病院は、すでに患者さん支援の新たな局面を見据えているようです。

施設DATA

医療法人社団　五稜会病院

所在地／北海道札幌市北区篠路9条6丁目2-3
ＴＥＬ／011-771-5660
理事長／中島 公博
院　長／千丈 雅徳